

諦める

あきら

勝ち戦よりも負け戦の方が
学ぶことの方が多い

来年の大河ドラマは「真田丸」です。その主人公真田幸村の父真田正幸のとある小説の台詞です。わが心の鰻頭に焼印でつけられたように刻み込まれています。

「あきらめる」とは、現在の日本語の用い方では、ネガティブな表現で使われますが、それは「あきらめる」を「give up」のみで解釈するからです。和英辞典を引いても消極的表現でしか訳されていません。和英をされた方の日本語表現の理解不足からでしょう。

仏教においては「あきらめる」は、積極的表現で用いられます。「諦める」には、ものごとをはつきりと見極める、あきらかにするの意があります。現実起きてほ



しくなく、現状をはつきりと見極め、原因を突き止め、それを克服するにはどうしたよいかと、お釈迦様は諦めの大切さを説いています。



「日本人はわすみ男に」
水木しげるさんの絵
が東京のお寺に
ある。いつか
見に行きたい。
文・仁・シム

仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。



世阿弥は生涯、芸を磨き続けた人だったのでしょ。およそ八〇年の生涯、老いの境地になつても、老いの芸を追求し、老いを楽しんでいたのではないのでしょうか。

共通する「阿弥」が、今回ご紹介の阿号です。法名に阿弥陀仏や阿の一字、阿弥の二字をつける習慣が、鎌倉・室町期の浄土宗や時宗にありました。世阿弥は様々な言葉を残しています。最も有名なものは「初心忘るべからず」ではないでしょうか。しかし、現在の初心とはいささか意味が違うようです。世阿弥の初心とは、初めての場面にどう対処して乗り越えたのか、これを忘れるなという事だったのです。そして、初心について三つにわけて述べています。

- ・第一に「ぜひ初心忘るべからず」若いときの失敗や苦労は忘れてはならない。・第二に「時々初心忘るべからず」その場で得たものを忘れてはならない。
- ・第三に「老後の初心忘るべからず」老いてこれだいたいと思つてはいけない

阿号

あごう

観阿弥、世阿弥と聞けば、思い出すことは能です。両者に

